

宮良作・宮良純一郎著

『東アジアの南向き玄関口 与那国島誌』

(南山舎、二〇一七年、二二三頁) を読んで

土屋 純

沖縄先島諸島には、私が小学生の頃、特別なイメージを抱いていた。南の島々、台湾に近い島々。その中でも与那国島は日本の最西端に位置する島であり、人々はどうのような生活を送っているのだろうか、考えたものである。しかし本書の副題には「東アジアの南向き玄関口」と記されている。与那国島は国土の端ではなく、玄関口すなわち最前線として位置づけられている。当然であるが、古くから台湾だけでなく、広く東アジア、東南アジアの国々との交流の中で島の歴史が形作られてきたのであり、小学生の私の想像を超えたものであった。

本書は、与那国島出身者の宮良作・宮良純一郎の両名によって書かれた与那国島誌である。加えて、屋富祖昌子氏、賀数清孝氏、渡辺賢一氏がそれぞれの専門的な見地を元に寄稿している。あとがきの中で「与那国島って、こんな特徴があります」と本書の内容を説明している。島に関する考古学的、生態学的、民俗学的研究が網羅的に紹介されており、与那国島の歴史、自然環境のなかでの生活誌が理解することができる。何よりも与那国島への愛に溢れたものとなっており、自衛隊基地建設の反対のように、沖縄先島諸島が置かれている状況に対する

確固とした意見をみることができる。

1. 本書の内容

では本書に展開されている内容について紹介したい。

第一に、与那国島の自然環境的な特異性である。与那国島の地形発達、気象の特徴、高密度の活断層度など、自然科学的な研究を紹介しながら説明がなされている。そして、自然景勝地について自然科学的な説明だけでなく、例えば、ティンダハナタの地名由来、天空(ティン)の家(ダ)の端(ハナタ)、のように、地名の由来についても詳しく説明されている。与那国島の地形は、八重山群層の砂岩の上に琉球石灰岩が載っている構造になっているが、ティンダハナタはこの2つの石の層の境目が崩壊してできたものと説明している。他にも地名に関する説明は豊かであり、その地誌的な内容は大変興味深い。

第二に、与那国島は水が豊富であることを指摘している。雨が多く表流水が豊富だけでなく、地下水もバリミ(割れ目)に集まり豊かに湧出することを説明している。琉球石灰岩は水を通す岩石であるが、その下の砂岩は水を通さないため、地下水は砂岩の上を西側のスバル(潮原)に向かって流れ、石灰岩の丘の切れ目で絞り水となって流れ出すのである。

十五世紀から十七世紀半ばまで、琉球を取り囲む海は、大航海時代、大交易の時代、そして御朱印船が行き交う時代とつながる要路の一つで、琉球による明など中国製品の買い入れ、経済の交流は、北の朝鮮、南は東南アジア、東は日本、ヤマトへ

と広がっていた。このように、与那国島は地球規模での人と物の交流を支えていた存在であると指摘する。与那国島は水と薪が豊富なので、航海する船舶の補給場所として活躍していた。

フランスの探検家ラブルーズが一七九七年に著した『VOYAGE DE LA PEROUSE AUTOUR DU MONDE』に掲載されている東南アジア図の中には、与那国島が「KUMI」と表記されていることを指摘されており、大航海時代のヨーロッパ人にも存在が知られていたことを指摘している。

第三に、希少野生動物植物が多いことが指摘されている。島のように限られた地域の現存種数は、島の大きさ（面積や山の高さ）及び大陸などの種の供給園からの移入率と、島に入ってから絶滅率によって決まる。与那国島は大陸の一部であった時代からの種の存在と常大陸から供給される種数が、島になつてからの絶滅種数を上回っていたのではないかと推測している。そして多様性を維持させたのは、地質的特性によって十分に蓄えられる大量の降雨であり、イダジイやタブノキをはじめとする食物群の存在が多様性を支えていたと指摘する。クバ（檳榔）の多さは全国一、など植生に関する説明もなされている。

こうした種の多様性を支えるのは、環境・平和・そして人権の三つの要素であると指摘する。軍事基地は、生命も故郷も奪うものであり、ここに生活者の視点はない。与那国島は、生物の存在様式を研究する上で格好の知的財産であり、かつ自然遺産そのものである。その自然遺産と島嶼経済との合流点を探る

ことが、琉球列島に課せられた課題であり、与那国島の貢献が期待されるテーマである。

第四に、島の集落の変遷とその生活誌である。埋蔵遺跡、口碑・伝承を主体として与那国島の集落の変遷を探っている。縄文時代から一八世紀にかけての集落の地理的変遷には、三つのルートがあると指摘している。主に狩猟採集時代には沿岸部に集落があり、グスク時代（農耕社会）には、内陸に集落が立地していったことを指摘している。狩猟や採集で生活していた人々が高台に（島仲ムラ、ドナンバラムラなど）に移動したと考えられる。

十五世紀末から十六世紀初頭にかけての与那国島は、原始共同体的な無階級社会から階級社会へと転換し、急激な社会の変革期であったと指摘する。原始共同帯的な無階級社会では、各ムラには族長的な指導的立場の人はいたが、土地は共同所有で農作業も共同作業によってなされていた。

沖縄貝塚時代に続くグスク時代（農耕を主体とした生産経済の時代、十二世紀から十五世紀）には、海岸砂丘地に居住していた人々が、ふたたび生活の場を琉球石灰岩の台地の上に形成するようになったが、農耕や集落の防衛にもっとも適した場所であった。牛に踏ませてターンミ（本田準備）から苗代づくり、田植え、二度の収穫（ひこばえ栽培と思われる）、収穫した稲を楼庫に保管、そして脱穀、精米と、一連の稲作・米の生産過程の技能を当時のムラの人々は持っていた。

十五世紀末の与那国島のムラ社会は、いわゆるグスク時代の

末期にあたり、琉球の中央集権体制に組み込まれつつあった。

与那国島が琉球王国の統治下に入ったのは、一五一〇年に西表島の祖納当が与那国与人に任命されてからとされている。口碑・伝承ではその頃女性酋長サンアイ・イスバが島を統治していたと伝えられている。不明な点が多い一四世紀から一六世紀について、民衆の暮らしよりは未知の部分が多い中、さまざまな資料を用いてその様子を復元しようとしている。一六世紀に入ると、琉球王国の影響がおよび、その支配下に組み込まれていくに従って、階級社会へと変貌していったと考えている。

第五に、バラサン（藁算）などの与那国島独自に展開してきた算出法である。文字が一般に普及していない（伝わらない）与那国島においてバラサンなどの独自の算出法について検討している。町反畝制は薩摩の慶長検地によって移入された面積単位であるが、それと坪単位の相互変換は人頭税制の下、文字や数字を使うことができなかった当時の農民にとって必要に迫られた課題であった。そこで生まれたのがバラサンであった。

バラサンの大部分が人頭税に掛かる数量を表すために使われ、板札は納税通知書として使用された。役人と庶民の間で用いられていたバラサン、板札は、貢納物の数量の記録、管理に効果があったと考えられる。さらにあとがきの中で、こうした算出法は他の島々や地域にも共通性があることが指摘されており、今後の研究が期待される。

3. 先島諸島の多様性と与那国島の位置付け

以上、宮良作・宮良純一郎の著作について紹介してきた。与那国島の特徴について体系的に整理された著作を読むと、決して大きくはない与那国島の歴史・文化・民俗の奥深さに感激することが出来る。東アジア、東南アジアと海で繋がる位置にある与那国島は、水が多いという特徴の中で豊かな生活誌が生み出されてきた。郷土愛に満ちた知識人によってこのような著作がまとめられたことは、多くの人々に与那国島を知ってもらうきっかけになると思われる。そして、与那国島だけでなく、石垣島、西表島、竹富島など個性的な島々によって構成されている先島諸島の多様性に改めて興味を惹かれる。先島諸島は、山があり水が豊富な「高い島」と、平坦が島で水資源に限ら得ている「低い島」の2つに大きく島々を区分することができる。農耕などのように、高い島、低い島それぞれに共通する部分があるが、それぞれの島々において個性的な民俗、文化が展開されているところに先島諸島の興味深さがあると考えられる。これらも先島諸島についてさまざまな知識を吸収し行きたいと考える。

そして、近年の与那国島において重要な出来事は自衛隊基地の立地である。日本における近隣諸国との緊張関係が高まっている事情があるとはいえ、島の現状に対して配慮のない開発が進められていることに著者は大きな警鐘を鳴らしている。生物多様性の毀損だけでなく、平和憲法の重要性を訴える本書を読

み、改めて考えさせられることが多かった。日本国憲法をチマムヌイ（島言葉）に変換したものも本書に書かれているが、著者の切なる願いを読み取ることができる。国防、平和といった広範な論点がどのように地域に拘るのか、普段考えることが少ない人々に本書が読まれることも意味があると考ええる。